『流(なが)れるハート』

作者　淺羽　一

三日ぶりに彼女が帰ってくる。部屋は勿論、綺麗に片付けて、夕食の用意もして、全て何もかも迎える準備は万端だった。だからこそ、リビングのソファにどっかりと腰を下ろし、何も知らずに帰ってくる彼女を待っていた。込み上げる笑みは、せめて今くらいそのままにしていても良いはずだ。

長いようで短い三日間だった。と言うよりも、濃密な時間だった。これ程までに自由に楽しんだことは久方ぶりだった。だけど、それなのに、いざとなると彼女が帰宅するまでの一時が短いようであまりにも長い。

がちゃりと、音は唐突に響いてきた。てっきりインターホンを鳴らすとばかり思っていたので、慌てて玄関へ向かうと、キャスター付きの大きなバッグを転がした彼女が独り言のような「ただいま」を呟きながら入ってくる所だった。

「…あれ、いたんだ」

出迎えに気付くやいなや、開口一番にそう言った彼女は、こちらが応えるよりも先に「いたんならさ、荷物くらい持ってよ」。

何というか予想以上に疲れている様子で、とりあえず黙ってバッグを受け取ると、彼女はこちらを置き去りにして、さっさと部屋に上がっていった。

「あぁ～、疲れた～」

リビングに戻ると、彼女は早くもストッキングと上着を脱ぎ捨て、ソファの上に倒れ込んでいた。

「帰りのタクシーの運転手がさぁ、神経質っぽくてミラーでちらちら見てくんのよね。おかげで、空港からずっと同じ姿勢よ」。腹這いのまま顔を上げもせず、器用に文句を言いながら左右のピアスを外す彼女。膝丈のタイトス‐カートから伸びるふくらはぎが、時折、泳ぎ疲れた人魚のひれのように上下していて、声に出さず苦笑した。

そっと近付き、ふくらはぎの上に手を添えた。彼女は気にした風もなく、「ただでさえ飛行機もエコノミーだったのにさぁ」と、まだまだ吐き出し足りない愚痴をこぼしている。もう何年前になるのか、同棲を始めたばかりの頃、同じように仕事から疲れて帰ってきた彼女の足を揉んでやろうと触れた瞬間、小さな悲鳴を上げてこちらを見てきた当時の可愛らしさは、悲しいかなすでに思い出の一つになっているらしい。

「…何よ。今日はずいぶんと優しいわね」

ソファの横に跪き丁寧に足を揉んでいると、しばらくして、ようやく彼女が顔を上げた。頬杖の上から注がれる冷たい眼差しは、けれど困惑を隠すポーズであるだろうことは分かっていた。「何か企んでる？それとも、私が出張の間に何かまずいことでもしてたとか」。

勿論、何も答えなかった。ただ、軽く肩をすくめて、太股の内側にあるツボを押してやる。そこは彼女の弱点なのだ。案の定、彼女は今度こそ可愛らしい声を上げて、後は「まぁ、良いけど」と気持ちよさそうに身を任せてくれた。

一時はどうなるかと思ったが、全ては順調だった。実際、手の平に伝わる感触のように、彼女の放つ空気も柔らかくなっていた。いっそ、このまま寝かしてやろうかとも考える。

しかし、せっかくの用意をふいにするのも勿体ないので、結局は心を鬼にして、終了の合図代わりにお尻をピシャリと叩いてやった。彼女が小さな悲鳴を上げて、「何すんのよ」とこちらを睨んできた。

不服そうな視線を受け流して立ち上がると、ダイニング‐キッチンの奥からグラスを二

つ、持ってきてテーブルに置いた。わざわざこの日の為に用意した新品のシャンパン‐グラスだ。当然ながら、買ってきたのはグラスだけでない。
どうだ、と言う感じで彼女を見下ろしてやる。すると、最初はきょとんとしていた瞳が、すぐに丸くなり、やがて見る見るうちに細くなった。ワイン好きの習性なのか、こう言う時の理解力は素晴らしい。
「どうしたのよ、誕生日でもないのに。本当に、何か企んでるんじゃないんでしょうね」
言葉とは裏腹に、その声は嬉しそうで、実際、彼女は疲労も忘れたみたいに立ち上がっていた。けれど、心の鬼はまだまだ彼女を甘やかさない。
「…分かったわよ。先にシャワーを浴びてくるから、その代わり、出たらすぐに飲めるようにしといてよ」。恨めしそうにこちらを、或いは名残惜しそうにグラスを見つめながら、リビングを出て行く彼女に笑顔で手を振ってやる。のんびりしてくると良いだろう。そうしてくれれば、こちらも余裕を持って準備が出来るというものだ。それに、気を遣った場所はリビングだけではないのだから。
見慣れた後ろ姿が廊下へ消えるのを確認してから、いそいそと動き出す。まずはテーブルの上のグラスをいったん冷蔵庫の中にしまい、代わりにキャンドルや食器を並べ、それらの中心のバスケットには、少し前にテレビで見た有名店の手作りパンを盛る。それから、電子コンロのスイッチを入れて、そこに載せてあった鍋の中身をかき混ぜる。途端に、ダイニングの中をビーフ‐シチューの甘い香りが包み込んだ。パンに、シチューに、シャンパンに、キャンドル。あまりと言えば定番過ぎるセットかも知れないが、王道とはそれだけ失敗も少ないものなのだ、色んな意味で。万が一を恐れて何度目になるかも分からない味見をしたシチューは、やはりちゃんと異国の味がしていた。
再びコンロの電源を切り、リビングにあるCDコンポのスイッチを入れた。やがて流れてくるのは、ピアノとサックスが絶妙に絡み合うフュージョン…のはずだった。
「ちょっとっ」
だけど、再生ボタンを押すよりも早く、いきなり部屋に響いたのは、恐ろしい形相をした彼女の声だった。念のために断っておくが、恐ろしいと言ったのは、何も彼女が全ての化粧を落としていたからではない。
「…そう言うことだったのね」
思わずCDコンポに指を伸ばした姿勢で固まっていたこちらに向かって、彼女は急に声量を落としてきた。だけどその分、声質は鋭さと硬さを増していた。
「おかしいと思ったのよ。いつもはそんなこと全然しないくせに、急にこっちのご機嫌取りみたいなことをしてきて、しかも料理とかまで。なるほどね、要するに、後ろめたかったってわけだ」
何を言われているのか、さっぱり分からなかった。だが、彼女はそんなこちらの様子にさらに苛立ちがつのったのか、今までに聞いたことのないくらい冷たい声で、「浮気、したでしょ」。
愕然とした。まさか、何を根拠にそんなことを言い出すのかと、耳を疑った。
けれど彼女は時間が経過するに連れていよいよ確信を深めているらしく、終いには「ちょっと、こっち来なさいよ」。
止める間もなく歩き出した彼女を追うと、その先には開け放たれたままのトイレの扉が

あり、まるでナイフさながらに丁寧に手入れされた爪の先が、その中を指していた。
「これ、何よ」
促されて視線を移すと、壁に固定されているトイレット‐ペーパー、その端が綺麗なハート形に折られていた。
「三角とかならまだしも、ハートなんて、ずいぶんと馬鹿にしてくれてるじゃない」
言うやいなや彼女はそれを掴んで引きちぎり、蓋が開いたままのトイレに向かって投げ捨てた。乱暴に破られて尚、綺麗な形を保っていたハートは、しかしトイレの底に溜まった水に半身を浸けた途端、ふにゃりと崩れて意味を失った。
「で、何処の女よ。こんな挑戦的なことをするなんて、良い根性してるわよね」
まさか、こんな所で躓くなんて思ってもいなかった。だから、すぐさま弁解をした。誤解なんだと、これはただ単に、喜ばせようと自分でした事なんだと。
「嘘吐き」
一言だった。
そして彼女は、「本当にさ、馬鹿みたいじゃない。久しぶりに優しくされて、ちょっと浮かれてさ、私、本当に馬鹿じゃない」。…いつしか、その口調は震えていて、声は湿っていた。
焦った。何とか泣き止ませようと、それ以上に分かって貰おうと、彼女の頬に手を伸ばした。だが、濡れた肌に触れた途端、激しく払いのけられて、しかも「触らないでよ汚らわしいっ」。
いよいよ本気で嗚咽を漏らし始めた彼女には、最早、こちらの話を聞く気などまるで無さそうだった。
しかしながら、諦めるわけにもいかなかった。そこでもう一度、改めて誤解なんだと彼女を説得に掛かる。
すると、返ってきたのは、背筋の寒くなる眼差しと、感情を押し殺したような「…なら、浮気じゃないって証拠を見せてよ」。
証拠、と言われても、何もしていないのに証拠なんてあるはずがない。
「その、ハート」と、彼女がすでに原形を留めていないトイレット‐ペーパーの残骸を指差し、「自分で作ったって言うんなら、それを見せてよ」。
それならばお安いご用だと、すぐさまその場を離れて自室に向かおうとした。だが、寸前で「何処に行くのよ」と止められる。
「逃げないでよ」
逃げるのではない。ただ、折り方の手順が記された紙を取りに行きたいだけだ。たまたまインターネットで見つけて、プリント‐アウトしたものだ。
「やっぱり嘘なんでしょ」
嘘ではないのだ、本当に。トイレ掃除のついでの、ちょっとした余興のつもりだったのだ。
「なら、出来るはずでしょ。あんなの、大して複雑でも無さそうじゃない」
確かに、それほど複雑では無かった気もするが…。
「もしも出来たら、浮気なんかしてないって、信じてあげるわよ」
…やるしか無さそうだった。ズボンのポケットの中で今か今かと出番を待っているもの

を、このまま無駄にするわけにはいかない。
容赦なく浴びせられる不信感と、必死に手順を思い出そうとする焦燥感が、体内で掛け合わされて酷い緊張感を生む。何度も服で両手を拭くが、嫌な汗は止めどなく滲み出す。
まずは、無理矢理に千切られた紙の端を掴んで、軽く引き出してからゆっくりと破った。一直線になった紙の端を確認して、手の中にある紙をひとまずトイレに捨てた。直後、彼女がレバーを動かして、大きな音に呑み込まれるように流れていく紙の切れ端とハートの残骸。ちらりと様子を窺うと、彼女は無言でトイレの底を見下ろしていた。
うろ覚えの手順を頼りに、何とかハートを再現しようとした。まずは、長めに引き出した紙の端を三角に折り、それをもう一度、三角に…いや、違う。最初に三角に折ってから、それをいったん元に戻して、反対側から改めて三角にするのだった。そうして紙に癖を付けたら、今度は紙を平行に折り返して長方形を作り―。
「いつまで待たせる気？って言うか、もうそれぐちゃぐちゃだけど」
手汗のせいで紙が指に張り付き、思っている以上に上手くいかない。そこで紙を破り、再度、挑戦を試みる。彼女は何も言わなかったものの、またいきなりトイレの水を流して、こちらの苦心の跡を消し去った。
とにかく落ち着けと、己に言い聞かせた。それから、作業へ。
紙の角を対辺に合わせるように三角に折り、それを戻して今度は同じ事を反対側で。紙に十字の癖を付けたら、その中心で折り返すように両端を持ち上げて長方形を作る。
…良し、此処までは大丈夫。そうしたら、次はまた、下にあるそれぞれの角をつまんで小さな三角形を―と、破ってしまった。何くそ、もう一度だ。背後でまた水の音がした。
そうやって、さらに二度の失敗を繰り返した頃には、ようやく大体の手順を思い出していて、指も細かい作業に慣れつつあった。
だが、紙の形がいよいよハートに近付いてきた、その時だった。おそらく後少しで完成するはずなのに、そこからの記憶がすっぽりと抜け落ちていたのだ。
困った。どれだけ脳みそをほじくり返しても、一向に出て来ない。ここからなら何とか誤魔化してそれらしく見せることも出来そうだったが、それは単純に失敗するよりも悲惨な結末を導きそうで恐かった。
「どうしたのよ、もう終わり？」
彼女はもう泣いていない。それが余計に痛々しい。でも、紙がふやけてせっかくの作業が台無しになるほど手に汗がにじんでも、記憶はちっとも蘇ってくれない。
「あぁ、また失敗ね、それ」。横から伸ばされた手が、紙をちぎってトイレに捨てる、濡れて崩れる未完成のハート。
「で、まだ続ける気？」。
問いかけには答えなかった。けれど、新しく紙を引き出すこともしなかった。
しばらく、溶けていくハートを眺めた、その末に、静かに立ち上がり、「何よ」と挑む風に言ってくる彼女を真正面から見つめた。
覚悟ならば、ずっと前から出来ていた。ただ、なかなかタイミングが合わなくて、なおざりに済ます真似も出来ず、そんな中でやっと回ってきたサプライズのチャンス。まさかこんな展開になるなんて予想も期待もしていなかったけれど、もう迷っている暇はなかった。だから、手の平に付いたトイレット-ペーパーのかすを払うと、ポケットから小さな

箱を取り出した。
彼女が息を呑んだ。気付けば自分も唾を飲み込んでいた。
蓋を開け、想いの全てを込めた指輪を、そっと差し出した。
果たして、彼女の返答は…。
「…馬鹿にしないでよ」
小さな呟きの直後、彼女はそれを指でつまむと、「本当に、何を考えてんのよっ」、癇癪を起こした子供みたいな声を上げて、思い切りトイレの底に叩きつけた。陶器と金属のぶつかる音よりも遙かに強く、水面に拳銃の弾を撃ち込んだような音が印象的だった。
それから間髪を容れず、彼女がレバーに手を伸ばした。
待てと言うどころか、何をしようとしているのかきちんと理解する暇もなかった。
気付いた時にはもうすでに、水は渦を巻いていた。
「もう、勝手にすれば良いじゃない」
水音の向こうから、寝室へと駆けていく足音が聞こえてきたが、追いかけなかった。いや、追いかけなければと考える余裕そのものが失われていた。
ごぼごぼと鳴り、ぐるぐると回る水の底で、必死に作ったハートは破れ、溶けて流れ。
やがて水音が止んだ時、底には何も残っていなかった。
ダイヤモンドをあしらわれたオープン-ハートのプラチナ-リングは、彼女が昔、婚約指輪に欲しいと言っていたものだった。

〈了〉